

表れず。されど、貧しき者は、貨財を以て禮とせず、力に及ばざる贈物を、力て行ふにはあらず。老いたるもの、筋力を以て禮とせざるが如し。また、よからざる物を人に贈るは、贈らざるに劣る。贈物によりて、其人の志の實不實表る。贈物にも心を用ゐて、愛敬の誠を行ふべし。下人に任せて、濫悪なる物を、人に贈るべからず。人に對して物いふに、我が位と年とのほごを省み、又、對する人の位と年との品を知りて、人の宜にかなふは禮なり。若し、未だ物なれざる人は、少しは、人を敬ひ過すは、筋にあたらざれども、大なる誤りにあらず。わが位より驕れるは、無禮にして、大なる過なり、見にくし。座に着くにも、我が身に宜しきよきほごの所に着くべきを、田舎人か、また禮しらぬ人は、人の請せざるに、高座に上り過ぎて、見苦し、笑ふべし。わが位より下座に着くは、禮にあたらざれども、大なる誤にあらず。我が身を卑下して、人に高ぶらざるは、誠によし。されど、あまり卑屈にして、謙り過し、着くべき座敷などにも、容易着かず、道ゆくにも、我が先へ行くべき位なれど、辭して行かず、我が前にめぐり來れる盃をも飲ますして、人の言を多く費さし

むるも、かへりて無禮なり。たゞわが當然なるべき程をば、強ちにつよく辭退すべからず。位ある人、老いたる人、下座にありては、卑しく、若き人の居るべき座なくして、各、其の處を得ざることあり。しかれば、卑下するにも、過不及なかるべし。人の譽め貶りを聞くこと、よく察すべし。譽むる人、誹る人、智なくして、人の善惡と事の是非とをしらす。其上、私ありて、わが氣にあへるを譽め、氣にあはざるを誹れば、善惡亂れて、人を迷す。かゝる人の譽め貶りは、必ず、信すべからず。これを證すれば、あやまりて、是を非とし、非を善とし、咎なき人を恨み、善人を遠ざけ、悪人を近づければ、其の禍甚し。人の譽め貶りに迷ふべからず。心あへば、千里も相親しみ、心あはざれば、隣家も往來せず。或は、日々に對談しても其の心をしらす。或は、千里を隔てても、其の人を相慕ふ。是れ、心の合ふと合はざるに因れり。心の合へる人稀なり。思ふこといはでたゞにややみぬべき我にひとしき人しなれば」と詠みけんこと、宜なり。世に相識れる人多けれど、同心の人稀なり。其の上、人をするに、至りてかたし。兄弟にても、相識らざること、世に

多し。人の我を識らざるを恨むべからず。

賓客を久しく待たしめざるは、主人の禮なれば、古人のよしとすることなり。客來らば、我が位より卑しき人なりとも、早く出て對すべし。久しく待たしむべからず。客を久しく待たしむるは、無禮の至りなり。富貴權勢の家に、必ず此の誤あり。もし、故ありて、早く出であふことならずば、人をして其の由を告げやるべし。周公は、文王の子、武王の弟にて、其の位貴かりしかど、客來れる折ふし、髪洗ひ給へば、髪を握りて、客にあひ、飯をくひ給へば、口中なる食を吐きて、客にあひ給ふ。人の心を失はんことを畏れ給ひてなり。又、家に教なければ、其の奴僕、必ず、客に對して無禮なり。殊に、權勢の家の奴僕、主人の戒なければ、必ず、主人の權勢に誇り、賓客に驕りて、無禮を行ふ。是れ、諸人の怒り憎む所なり。其の奴僕は責むるに足らず、其の科は、皆主人に歸す。主人たる人、是をしらざるべけんや。陸宣公曰く、寧人負我、我勿負人。是れ、忠厚の道なり。忠厚とは、人を愛すること、眞實にして厚きなり。人のよきにめで、我をよくするは、厚といふべから

す。人の我に背き、われを誹るを怒り恨みず、我より人に背かずして、怒らず、恨み誹らず、人の我にしたがふと、従はざるを心にかけざる、是れ、厚といふべし。もし、如此ならば、彼亦人なれば、感じて従ふべし。従はずとも、わが心法に害なし。瘖は、口物言はず。聾は、耳聞かず。口耳に聲言の通せざるのみに非ず。心にも、また生れつきて、瘖のいはざるが如く、聾のきかざるが如くに、理の通せざる人あり。其人と、是非を争ふべからず。是と争ふは、我も亦人を知ざるなり。愚といふべし。わが許に来るべき人、久しく來らずとも、故あるならんと思ひ、恨むべからず。此方よりは、親しき人には、親を失ふべからず。これ、厚き道なり。人、われに對して過あらば、心を廣くして、恕すべし。我が身に過あらば、心を小にして、責むべし。

對しがたき人に對せば、彌、厚かるべし。なしがたきことをなせば、彌、緩なるべし。急なることに對せば、彌、靜なるべし。是れ、古人の言なり。或人、祐筆に文を書かするに、急用のことなり、靜に書くべしといへり。又、俗語に、急がば廻れとい

へるも、其の意同し。

人の善言を聞きて、移り易きは誠によし。人の不善なることばを聞きて、移り易き人あり、迷へりと云ふべし。是れ、知なければなり。よく心の内に思案し、其の言の是非を辨へて、悪しき言に迷ふべからず。

古人の言に、衆人を以て人を望めば、人従ひ易しといへり。衆人とは、凡夫のことなり。人の我に對し、不義なるをば、凡夫なればかくこそあらめ、と思ひ、宥め怒して、咎めざれば、人われに従がひ易く、人背かすとなり。君子の道を以て矩にして、凡夫を一々糺せば、一も矩にあはず。一人も全き人なかるべし。かくの如くすれば、人われに従はず、背き易し。僻事多きは、浮世の習俗ぞと思ひ悟りて、人を咎め世を恨みざること君子の心なり。

喜によつて、人に物を與へ、賞を行ひ、怒によつて、人を責め、罰を行へば、必ず、理にあたらすしてあやまる。喜怒の時、耐へて事を行ふべからず。喜もやみ、怒もやみ、常の心になりて後、事を行ふべし。訟訴を聽く人、訟ふる者の言によりて、

怒を起し、悦をなすべからず。怒れば、必ず、非分の責を行ひ、悦べば、罪あるを怒す。慎むべし。人を治むるには、まづ、わが心を治むべし。我が心治まらずしては、理非を分ちがたかるべし。怒によつて、理を枉げ、是を非とし、罪を重くするは、賄賂に耽りて、理を枉げて、罪を軽くするに同じ。

事に處するには、よく思案し、靜に行ふべし。よく思案すれば、理に背かず。靜に行へば、過すくなし。下に對するに、わが心に、偏見偏頗の私なかるべし。我が心に合ひたるものをば、偏に愛し、氣に不合者をば、偏に惡むは、是れ、愛憎の私なり。如此すれば、人に施すに、過不及ありて、公ならず、衆人は、愛過ぐれば驕る。愛せざれば恨む。是れ、偏愛偏憎の私よりたこる。人に對し下に施すに、私なくして、其の人の、貴賤親疎功罪賢愚に隨ひて、與ふべきほど與へ、與へまじきには與へず。かくの如くなれば、幸不幸なく、過不及なくして、諸人の憤なし。人々、其の處を得て、不足の恨みなし。是れ、平和にするなり。

暇ある人、寂さのあまりに、暇なく時を惜む人の許に來り、心の長閑けく、よしなき長物語し、主人に厭はるゝこそ、無下に心なき業なれ。去ど、かゝる人に對せんとき、わが心にかなはずとも、一向に、面のけしきあしく、詞づかひ不順なるべからず。人、われに對して、不應に無道なることをしかけ、言ひかけて、甚だ、わが心に背くことあり。是れ、横逆の人なり。かやうの處を逆境と云ふ。世に交るには、必ず、かくの如くなる横逆の人あり。かゝる逆境にあひたる時ごとに、必ず、堪忍の工夫をなして、怒り恨むべからず。色に表し、言に表すべからず。是れ、動心忍性で、氣質を變化し、心を磨きて、學に進む時なり。空しく過ぐべからず。かやうの時、常に心にかけて、忍べる工夫をなすべし。

人のするわざ、其の善惡、十分にじれて、明白なること有り。又、其の事の有りさま、其の人の心の中、善さも悪きさも、明かにしらざるこそ多し。わが心に惡しと思ふことも、その實をよく尋ねれば、道理あることあり。善しと思ふことにも、善からざることあり。かやうのこと、唐も日本も、古今多し。天下皆非なるの理なし、と

古人もいへり。何事も、人のしわざに故あらんと思ひ、妄に、人を憎み誹るべからず。又妄に、譽むべからず。友をさるには、人を選び、人の心を知りて、後、交りを定むべし。しらすして交れば、後悔することあり。人心は、隠れて知りがたし。同じ官職を勤め、事に出合ひ、旅宿を共にするやうのことにて、其の人に馴るれば、人の心見ゆ。人と共に、同じ官職をつとめ、同じ技藝をさる者、われのみ獨り身を立て名を得んとすべからず。かくすれば、人も又争ひて、我をたてじとす。是れ、かへつて、身の禍となる。己たゝんとせば、まづ、人をたつべし。かくすれば、人も亦争はず。才あるもの、わが才に誇り、同官を輕蔑にすれば、必ず、同官に憎まれて、禍にあへる人、古今多し慎むべし。我一人にて事をとらんとするは、甚だあし。よきことは、同官に譲り、我一人の才名を現さんとすべからず。世に居るには、人情をしり、時變を考へて、天命に安んずべし。或老人のいへるは、年の積に、世の中のありさまを、とかく思ひしりゆくまゝに、わが生る子、わが祿を

與ふる奴僕だに、わが心のまうになりがたし。況んや、世の人の心、さまざまにかはれば、わが思ふままに従ひがたし。畢竟、たゞ、わが身を修めて、人を責めざるべし。是れ、世に居るの道なり。

凡そ、人に交るに、其の人、よく物いひ、才働きて、我が心になへりとも、其の陣子正しからず、心術疑はしくば、交りを深くすべからず。後に、必ず、我が身の害となることあり、悔ゆれども益なし。是れ、久しく世を経て、多く人に交りてし人のいふ所なれば、違ふべからず。若し、後まで害なきは、是れ幸なり。家臣を使ふに、殊更、此の自き、心得あるべし。唐の張九齡が、安祿山に叛相あることを、豫て知りたるは、先見の明と云ふべし。才鈍くとも、邪なく、忠實なる人を用ゐるべし。眼前は快からざれども、後の患なく、且つ、わがしらざる所にも益多し。小人を用ゐ、小人に交れば、必ず後の害となる。

さばかりよき所ある人をば、一の辯、一事のやまりにより、すこし心にあはずとも、宥めてこそは有るべきに、一向に棄つること、惜しむべし。

人の悪しきのみを咎めて、わが身にかへり求めず。自ら修めざれば、怒り恨み多くして、わが心和せず。人と争ふことしげければ、世に立ちがたし。わが心に於ても、苦しみ多く、樂なかるべし。身にかへり求むる工夫を專一になすべし。かくの如くすれば、人我相和して、人と争なく、世に立ち易くして、其の樂を失はず。是れ人に交るの道なり。

我よりは、善を施すべし。彼よりも、亦、善を以て酬ゆることを望むべからず。彼は彼、我は我、我はたい、わが道を行ふべし。彼が善不善は、わが心に與るべからず。朋友親戚の間は、たゞ、誠を以て交るべし。若、われより久く音問も疎略にせば、只わが情の薄くして、疎略なることを謝すべし。餘事にことを托せて、偽りて、わが罪を謝すべからず。是れ、小事といへど、誠の道に非ざれば、心術を害することは大なり。易に、君子以遠小人、不惡而嚴。いふ意は、君子の、小人に對して遠ざからんとするは、顔色と言葉とを惡しくせず、只、わが身を嚴にすれば、かれ自ら遠ざかる。凡そ、人に交るに、其の人をよく選ぶべし。其の人の善惡見しりがたくば、先づ、

好んで交るべからず。かれより親しむとも、只、答の禮をば勤めて、われよりは疎かるべし。其の人小人なれば、親しみて後、必ず悔あり。すでに、親しく成りぬれば、小人としれども、俄に疎んじがたし。疎んずれば害あり。初め、其の小人なることをじらす、しるすといへども、かれより親しむ故に、防ぎがたくて、時々交ることあり。小人に交りては、必ず、後に何事ぞにつきて、大事か小事か、わが身の害ひとなる。古語に曰く、いふことなかれ、何の害かあらんと、其の禍、まさに至らん、といへるが如し。古人の言、遠ふべからず。小人としらば、わが方より疎んずべし。しかれば、かれ自ら疎くなる。

人をしること、極めて難し。古人といへども、人を知ることいと難きことなりといへり。況んや、今の人をや。もし、偽りて忠言を現し、謹厚なるやうにして、われに和順に善柔なりとも、其の信心じがたし。剛直なる人は和順ならざれども、かへつて忠實なり。わが子を頼み、わが家を頼み、わが身後のことを頼む、其の人に非ざれば、かへつて害あり。臣下朋友、凡て、人を用ひ、人を頼まば、知ありて忠信ある人を選

ぶべし。かやうの人、世に有りがたし。もし、なくんば、其の次には、才力鈍くとも、忠實なるを用ゐるべし。忠實ならずば、才ありとて用ゐるべからず。才ありて忠信なき人は必ず害となる、恐るべし。

○凡そ、人倫に交りて、其の交る所の人、われに對し、施し行へること、もし、禮義にあたらずして、わが心になはさずとも、人聖賢にあらばざれば、事ごとに禮義にあたるべからず。是れ即ち、凡人の常にして、古今天下の世のならはしぞと思ひ宥めて、心に掛くべからず。況んや、恨み怒るべけんや。わが身さへ、我が思ふ如くに行ひがたし。何を人われに施す所、わが心の如くならんや。わが身さへ、道に違はずば、人のわれに施すこと、道になはざるは、わが身に與らざる事なれば、心にかくべからず。我が憂ふべき事にあらず。人倫の内、われより位高き君父と兄父の、我に無禮なるは、言ふに及ばず、わが子弟臣僕の輩、われより賤しき者、我に禮義なくとも、禮を敬へ、其の罪を戒むるは、然るべし。心にかけて深く怒り怨むべからず。是れ、わが身を修め、人に交るに、自ら心を安くし、樂を失はずして、よく世に居るの道なり。



四六判雅美  
洋紙上質

# 十錢文庫

各冊  
實價十錢  
郵稅四錢

|         |        |        |        |        |         |          |        |       |        |         |          |          |         |        |         |         |        |
|---------|--------|--------|--------|--------|---------|----------|--------|-------|--------|---------|----------|----------|---------|--------|---------|---------|--------|
| 18      | 17     | 16     | 15     | 14     | 13      | 12       | 11     | 10    | 9      | 8       | 7        | 6        | 5       | 4      | 3       | 2       | 1      |
| 十返舎一九名著 | 爲永春水著  | 大槻誠之解訓 | 大槻誠之解訓 | 湯淺元貞輯録 | 湯淺元貞輯録  | 曲亭馬琴名著   | 室鳩巢著   | 貝原益軒著 | 曲亭馬琴傑作 | 十返舎一九名著 | 曲亭馬琴名著   | 柳亭種彦名著   | 香雨樓校註   | 靜村廷生序  | 寺門靜軒著   | 曲山人補綴   | 湯淺元貞輯録 |
| 木曾道中    | いゝろは   | 訓蒙日本外史 | 訓蒙日本外史 | 常山紀談   | 常山紀談    | 夢想兵衛胡蝶物語 | 翁道俗訓   | 大和奇談  | 美濃舊衣   | 東海道中膝栗毛 | 夢想兵衛胡蝶物語 | 評釋修紫田舎源氏 | 萬治伊曾保物語 | 皇正統記   | 評釋江戶繁昌記 | 評釋當世娘節用 | 山紀談    |
| (上)     | (一)    | (二)    | (一)    | (後)    | (後)     | (全)      | (全)    | (全)   | (前)    | (前)     | (一)      | (全)      | (全)     | (全)    | (全)     | (全)     | (前)    |
| 36      | 35     | 34     | 33     | 32     | 31      | 30       | 29     | 28    | 27     | 26      | 25       | 24       | 23      | 22     | 21      | 20      | 19     |
| 曲亭馬琴著昔  | 馬淵安定序訂 | 淡庵子編輯武 | 學庸論孟傍  | 馬淵安定序訂 | 平田止水居士輯 | 曲亭馬琴名著   | 葉室大納言著 | 自笑其碩著 | 奥田壽太講心 | 梅亭鷲叟序大  | 大槻誠之解訓   | 十返舎一九名著  | 大槻磐溪著   | 大槻誠之解訓 | 大槻誠之解訓  | 曲亭馬琴名著  | 件萬蹟著   |
| 語質屋     | 正太平    | 將威狀    | 訓四     | 正太平    | 一休諸國物   | 家屋       | 文字屋    | 文學道   | 岡仁政    | 岡仁政     | 日本外史     | 木曾道中膝栗毛  | 近古史     | 日本外史   | 日本外史    | 殿實      | 世時人    |
| (全)     | (二)    | (全)    | (全)    | (一)    | (全)     | (全)      | (上)    | (前)   | (全)    | (全)     | (完)      | (下)      | (完)     | (四)    | (三)     | (完)     | (完)    |

刊發々續下以



## 大川文庫

▲定價各廿五錢  
▲郵送料各四錢

▲携帶至便  
▲ホケツト形

製本、表紙最上、總クロ、入類美本、口繪、アイト、ロタイプ、美術印刷、本文、改正六號活字、新式平形、總振假名付、用紙、上等な、る舶來紙、赤門八十斤、印刷、振假名、などの鮮明、は是に及ぶ、ものなし

|        |          |        |        |         |       |       |         |        |        |        |         |         |        |        |        |        |        |        |        |
|--------|----------|--------|--------|---------|-------|-------|---------|--------|--------|--------|---------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| ○椿説弓張月 | ○赤穂義士銘々傳 | ○大坂夏御陣 | ○大坂冬御陣 | ○本馬能寺   | ○相馬大作 | ○川中島  | ○鹽原多助   | ○關ヶ原軍記 | ○越後傳吉  | ○人耶鬼耶  | ○荒木又右衛門 | ○塚原卜傳   | ○柳生旅日記 | ○源平盛衰記 | ○田宮坊太郎 | ○佐倉義民傳 | ○元和三勇士 | ○宮本武藏  |        |
| ○里見八犬傳 | ○太我川     | ○柳川庄八  | ○岩見武勇  | ○德川十五代記 | ○小栗判官 | ○更科勇婦 | ○御前志合   | ○三宗孝子  | ○正家三勇士 | ○三家三勇士 | ○三家三勇士  | ○三家三勇士  | ○三家三勇士 | ○三家三勇士 | ○三家三勇士 | ○三家三勇士 | ○三家三勇士 | ○三家三勇士 | ○三家三勇士 |
| ○大鹽平八郎 | ○渡邊華山    | ○關口彌太郎 | ○大岡越前守 | ○熊澤蕃山   | ○大石良雄 | ○有罪無罪 | ○俠客國定忠次 | ○元和後日譚 | ○三勇士   | ○片手美人  | ○塚原左美   | ○怪談牡丹燈籠 | ○日蓮    | ○塙團右衛門 | ○塙團右衛門 | ○塙團右衛門 | ○塙團右衛門 | ○塙團右衛門 | ○塙團右衛門 |



新刊書目

|         |         |         |         |         |         |         |         |         |         |         |         |         |         |         |         |         |         |         |         |         |         |
|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 松田竹の島人著 | 井川洗屋口著  | 松田竹の島人著 | 佐藤素洲口著  | 伊原青々園補  | 正川洗屋口著  | 倉富砂口著   | 熊耳耕年口著  | 渡邊默禪著   | 熊耳耕年口著  | 水島尺草著   | 落合芳屋口著  | 水島尺草著   | 落合芳屋口著  | 渡邊默禪著   | 倉富砂口著   | 山村歩水著   | 松田竹の島人著 | 佐藤素洲口著  | 渡邊默禪著   |         |         |
| ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       | ○       |         |
| 弘法      | 高遠      | 正直      | 青年      | 靨八      | 幸七      | 化八      | 飛行      | 飛       | 列       | み       | れ       | 日       | 變       | 春       | 命       | 石       | 家       | 屋       | 城       | 郎       |         |
| 前編金四十錢  | 後編金四十五錢 | 前編金四十五錢 | 後編金四十五錢 | 定價金四十五錢 | 定價金四十五錢 | 定價金四十五錢 | 定價金四十五錢 | 定價金四十五錢 | 定價金四十五錢 | 定價金四十五錢 | 定價金四十五錢 | 定價金四十五錢 | 定價金四十五錢 | 定價金四十五錢 | 定價金四十五錢 | 定價金四十五錢 | 定價金四十五錢 | 定價金四十五錢 | 定價金四十五錢 | 定價金四十五錢 | 定價金四十五錢 |

東京大川屋發行書肆

東京市淺草區大川屋發行

電話一七五三番振替東京〇〇九番

勝安房君題字  
海江田君題字  
三好中將君題字  
嘉納治五郎君序  
柳原健吉君跋文  
吉田千春先生  
磯又右衛門先生 合著

天神柔術極意教授圖解



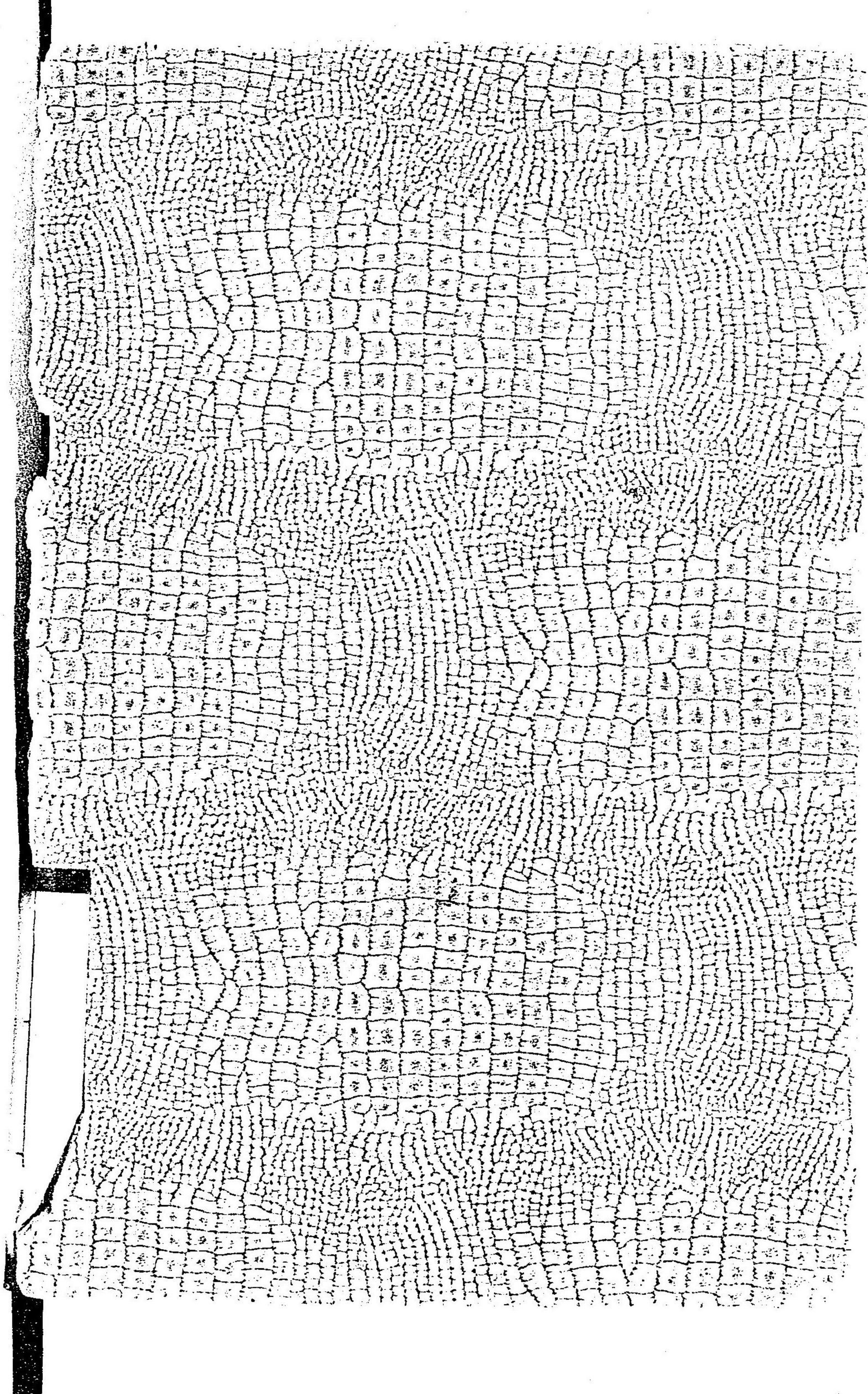
四六判裝打美製  
插畫二百廿余个入  
紙數二百八十余頁  
全一册  
郵稅共金四十錢

文士大町桂月著

訂 增  
翰書月桂

洋裝定價五拾五錢 小包八錢

當時中學社會を中心點として、上下に雷名を轟かしつゝある、文豪大町桂月君が、其の日常知己朋友及び貴顯紳士の方と、とりやりしたる手紙の傍を知らんとすれば、本書に若くものなし、本書は實に文章流麗に才思湧くが如く、更に増補して社會萬般の入用の書翰は悉く網羅し、而して之れ亦高詞に流れず、卑俗に陪らず其の彩筆陸離、光燄萬丈たれば、實に錦上に百花の爛熳たるを加へたるの感あり、請ふ、滿天下の諸君、一本を購ひ得て、如何に其の趣味の津々で、且つ刻下社會各方面に向て緊切適當たる珍書たることを知り給へ。



159

Ka183y2

Ⓜ

011482-000-4

159-Ka183y2

大和俗訓

貝原 益軒/著

M44

AAE-3161

